

比較の視点から

―渡来人伝説をめぐって―

達 志 保

はじめに

二〇〇五年十月の第五十回研究例会「伝説研究の新潮流」において、表題のテーマで報告の機会をいただいた。渡来人伝説は地域の人々の日々の暮らしの中で、どのように生かされてきたのか。生かされようとしているのだろうか。筆者は伝説と取り巻く地域内外の人々との関係について、「伝説の現在」に注目しながら追いつけている。⁽¹⁾

本研究例会で筆者は比較の視点からのアプローチを課せられた。しかし渡来人伝説の比較研究を積極的に進めていこうという決意を持ってここまでできたわけではない。渡来人伝説を様々な地域で聞き取りながら、ごく限られた地域の中で綿々と伝承されてきた従来の伝説の伝承モデルとは別の伝承の実態に接してきた。地域間が影響を与えながら伝承そのものを創りあげていくという実態に導かれていく中で、伝説におけるグローバルリズムを意識しないわけにはいかなくなったのである。

本稿では本研究例会における報告の内容に沿いながら、筆者の比較の視点と今後の展望を記してみたい。

一、多様・多重な伝承主体

さまざまな渡来人伝説を検討してみると、出発点・経由点・到着点のそれぞれの伝承が、他地域の伝承に影響を受けながら、各伝承地の視点から渡来人伝説を構成し、存在していることがわかる。伝説は孤立してあるのではなく、海が伝説を繋いでいるというのが実感である。

今回の報告では、渡来人伝説の中から徐福伝説を取り上げた。徐福は今から約二二〇〇年前、秦の始皇帝の命を受けて東海に不死薬を求め、童男童女や先進の技術者、五穀の種を持って船出したと言われる人物である。中国の史書『史記』に記された徐福求仙の船出は、その後、千年を経たあたりから、後日談として日本や韓国への渡来伝説が生まれ、その後現在に至るまで多くの文学作品の中にその姿を表してきた。

現在、徐福伝説は日中韓という東アジア地域において、様々な形で伝承されており、その伝承地は日本だけでも二十数ヶ所を数える。正確な数を示すことができないのは、伝承地の数え方が一律ではないことと、伝承地そのものが現在も増え続けているという現象があるからである。それぞれの地域が情報の共有によって日中韓のネットワークの中で伝説の現在を記録しつ

つある。

中国の一例をあげるならば、江蘇省連雲港市にある徐福村^②は、一九八二年に「徐福の故郷」発見として話題となった。一九八八年には、一九四二年に日本軍によって破壊された徐福祠が再建された。徐福の故郷ということでは日本からの観光客もあり、そうした人的往来のなかで「片葉の蘆」の伝説を聞くこととなった。これは金山鎮人民政府製作パンフレット『徐福の故郷—金山鎮』にも記されているが、解説として「片方に葉っぱが生える蘆のことで、金山鎮附近及び日本佐賀などに見うけられ、徐福によって日本に伝えられたといわれている」とある。これは伝説が地域外（佐賀）の人々によって運び込まれたのである。

韓国の例としては、済州島には正房瀑布という海に落ちる滝があり、徐福はこの滝を目印に上陸し不老草を探したが見つかることができず、再び船に乗り日本に向かったという伝説がある。正房瀑布の岩壁には「徐市過此（徐市^{フツ}徐福、此を過ぎる）」という金石文があったというが、戦争中に日本の澱粉工場が建てられ、その工場排水がその文字を消してしまったという。今は中韓の交流が盛んになってきており、二〇〇五年秋には徐福伝承地のある中国山東省からこの韓国済州島西帰浦市に徐福像が贈呈された。

最後に日本の例をあげておこう。福岡県八女市にある童男山古墳では、毎年一月二十日に徐福の求仙渡来を紙芝居にした祭

り「童男山ふすべ」が小学校と保存会の共催で行われている。八女市はこの祭りをきっかけに、国際交流の一環として中国の徐福村を訪問し、帰国後は中国の徐福研究者を招いてシンポジウムを行った。その後、中国で目にした徐福像をモデルに童男山古墳の近くに徐福像を建立した。

徐福とは一体どのような人物なのだろうか。実在するか否かさえはつきりしないため、自由に徐福のイメージを描くことができる。その一つ一つに地域の伝承や思いが託されているのである。それぞれの伝承地で起きている伝説の現在は、決してその地域の中だけにとどまるものではない。各地の伝承に日中・中韓・日中韓の人的往来が様々な形で影響を与えており、その中で新たな伝説を創りだしていく可能性の中に徐福伝説は置かれているのである。

ただ、戦中の日本の中国・韓国での行動が、徐福実在あるいは渡海の「証拠」を消し去った行為であることは頻繁に語られており、真偽ではなく、そのような言説が付与されることに對しても、今後注目していきたいと考えている。

いずれにしても、伝説の伝承に主体的に関わろうとする人々を「伝承主体^③」としたとき、そうした人々の存在は現在の伝説の実態を捉える上で欠かすことができない。郷土史家や地域振興のシンボルにしようとして取り組む人々、「歴史ロマン」に惹かれて生涯学習として取り組む人々、さらには研究者といった従来は伝承の外に追いやられていた人々こそが、伝説の現在

を創りあげているのである。

二、新たな伝説研究としての比較の視点

柳田國男は伝説研究で最も大切なのは収集であり、類型化し比較することで、伝説の変遷を明らかにしようとした。それらの前に伝説を並べることのできる研究者の視点であった。現在では、国内外の伝説を伝承する地域では、互いの伝承地の存在や動向について既に情報交換を始めている。いま目の前にある地域の伝承を、これまで研究者が用いてきた比較の視点とは異なる視点で、他の伝承地と比較して相対的に語ろうとしている。

伝承主体そのものが独自に比較の視点を設定し、その比較の視点や比較から得られた知見をも伝承していこうとしている。一つの地域を調査していくと、その地域以外の地域が見えてくる。渡来人伝説研究の現状を考えると、これこそ伝説のグローバルズムとすることができるのではないだろうか。

かつて比較民俗学に対して慎重だった柳田國男は、互いに十分に準備ができた上でこの方法を持ち込まなくてはならないという信念を持っていた。その準備が十分にできたと言いつけることはできないが、地域間の人やモノが既に往来している以上、研究者もまた、伝説の現在に目を向け、新たな比較の視点を設定して伝説研究に臨む必要に迫られている。

筆者は渡来人伝説を調査研究してきたが、渡来人伝説に限らず、伝説は多様・多重な伝承主体が、日々の暮らしの中で、地域や国レベルでの政治的動向の影響も受けながら、創りだしていく動的な存在ではないだろうか。地域社会の文脈を抜きにして伝説を語らないこと、動的な伝承の実態の把握から逃げ出さないこと、それが筆者の研究姿勢である。

伝説の比較の視点は渡来人伝説において既に始まっている。古代史に委ねてきた東アジアの交流の実態を渡来人伝説という伝承レベルで語ることも可能性も今後見えてくるのではないだろうか。

おわりに

最後に、以上述べてきたような比較の視点を、今後どのように意識化し、具体化していくべきかを考えておきたい。先に述べたように伝承地間の交流は、地域と人との自然発生的なネットワークとしてすでに始まっている。多くの伝承地の人びとは、互いの情報を交換し交流することを望んでいる。それにも関わらず、これまで地域の伝承を担ってきた人々、あるいは郷土史家が高齢になり、実践も含めた各地の実績がそのまま次世代に受け継がれることなく、情報として共有することもできないままに消えていこうとしているのが現状である。

こうした現状を見過ごすのではなく、これまでの人と人との

繋がりを背景に、東アジアという視点でネットワークを意識的に構築していくことを始めている。口承文芸の新たな比較研究の可能性を見出していくことも、民俗学のあらたな実践として必要ではないかと考えるからである。

注

- (1) これまでの研究成果となる著書・論文は、『徐福伝説考』(一九九一 一季出版)、『徐福論—いまを生きる伝説—』(二〇〇四 新典社)、『徐福伝説の創造と歴史の変容—福岡県八女市『童男山ふすべ』を通して—』(愛知県立大学大学院国際文化研究科論集) 3号、二〇〇二 愛知県立大学大学院国際文化研究科)、『伝説にみる伝承主体の多重性—熊野市波田須の徐福伝説をめぐって—』(口承文芸研究) 26号、二〇〇三 日本口承文芸学会)、『百済王伝説の現在—宮崎県南郷村の師走祭りと百済の里づくりにおける渡来人伝説—』(『昔話—研究と資料—』 32号、二〇〇四 日本昔話学会)、『崑崙人が運んだ綿の種—『歴史』を包括する渡来人伝説—』(『世間話研究』14号、二〇〇四 世間話研究会)、『百済王伝説—佐賀県加唐島の武寧王生誕伝説をめぐって—』(『国文学解釈と鑑賞 創られる伝説—歴史意識と説話—』 10月号、二〇〇五 至文堂) 等である。

- (2) 地名調査以前は徐阜村と表記していた。

(3) 伝承主体は、「伝説の管理者」という形で限定されてきた伝説の伝承者に対して、伝説の伝承に主体的に関わろうとする人たちという意味で用いている。個人もあり、集団もいる。伝承主体については、高桑守史氏が『日本漁民社会論考—民俗学的研究』(一九九四 未来社) の中で、民俗学が「地域社会における集団性に注目」してきたばかりに「同じ地域社会の中でも、多様な人生が存在してきたという事実への配慮」が漁民の世界を理解していく上で欠落してきたことを指摘し、積極的にこの言葉を用いている。筆者も同様の視点に基づくが、伝承の枠組みを考える上では、一つの地域社会という前提をも取り除く必要があるのではないかと考えている。伝承主体への注目によって、伝説そのものが掘り起こされる過去のものではなく、現在の日々の生活の中に生きているものだということが見えてくるのではないだろうか。

(4) 二〇〇六年度トヨタ財団アジア隣人ネットワークプログラムの助成を受け、「徐福伝説を『縁』とした地域と人のネットワークの構築」(助成番号D 06—N—036)を進めている。

(つじ・しほ／愛知県立大学非常勤講師)